

# 富士山を世界文化遺産に！



World

Heritage News Letter

## News List

- ◎『富士山と日本絵画』  
(静岡県学術委員会 委員 片桐 弥生)
- ◎シリーズ「構成資産候補の紹介」『三保松原』
- ◎富士山世界文化遺産国際シンポジウムから
- ◎世界遺産用語解説 『世界遺産評価基準』

## 『富士山』世界文化遺産登録への 新たな階段を登り始める!!

富士山の世界文化遺産登録に向けた取組を振り返ると「学術委員会での文化的価値等の検討開始(平成18年5月)」「世界遺産暫定リスト登録(平成19年1月)」「暫定リスト掲載の世界遺産委員会報告(平成19年6月)」「構成資産候補の選定(平成19年10月、平成20年3月)」など登録のために登りなくてはならない階段を二段ずつ着実に登ってきました。しかし、これは、いわば日本標準の階段、すなわち『富士山』に対し特別な想いを持つ私たち日本人の感覚で作った階段です。

『世界文化遺産登録』というステージに立つには、世界標準の階段を登る必要があります。このことから、昨年11月、海外の世界遺産専門家を富士山に招へいし、世界的かつ専門的見地に基づく意見を求めました。今後はこの意見などを基に検討作業等を進めていくこととなります。そう、富士山は、今まさに、世界標準という新たな階段を登り始めたのです！



静岡県学術委員会 委員 片桐 弥生  
(静岡文化芸術大学 文化政策学部 准教授)

富士山は平安時代以来描き続けられてきた。富士山そのものの形は現在と平安時代で大差ないと思われるが(噴火の有無や宝永山の出現などはあるが)、描かれた富士山の姿は時代によって変化するとともに、その時代の人々の様々な知識や思想が投影されてきた。

現存する最古の富士山を描く絵画は、平安時代延久元年(1069)に描かれた「聖徳太子絵伝」(東京国立博物館)の聖徳太子が黒駒に乗って富士山に登る場面である。聖徳太子の超人性を強調するエピソードだが、そこに描かれている富士山は、私たちが今イメージする富士山とはかなり異なる。山の傾斜は非常に急であり、山頂はいくつかの不規則な峯に別れている。山頂に雪は描かれず当初は緑色に塗られていたようである。

平安時代、富士山は霊山としてあがめられる一方、歌枕として和歌に詠まれ、『竹取物語』や『伊勢物語』にも登場する

などよく知られていた。現存しないものの絵画でも、和歌とともに鑑賞する名所絵として屏風や障子(今の襖)に描かれたり、『竹取物語』や『伊勢物語』などの物語絵にも描かれたと思われる。しかしその多くは富士山から遠く離れた京の都の貴族たちが描かせたものであり、描いた絵師たちも京都を中心に活動し実際に富士山を見たことはほとんどなかったのではないかと推測される。先に記した「聖徳太子絵伝」の不思議な富士山の描写もそのような絵師たちが、「高い山」「霊山」といったイメージを元に中国唐代の山水画などを手本に作り上げたのではと考えられている。

このような富士山の描写は、鎌倉時代になり東海道を行き来し実際に富士山を見る人が増えるにつれ次第に変化してくる。正安元年(1299)制作の「一遍聖絵」(歎喜光寺)第六巻第二段に描かれた富士山は私たちがイメージする姿に近い。きれいな円錐型で雪をいたたく頂上は整然と四つの峯に分かれている。この姿は実景に近いものであるが、実際の富士山はこのように整然と頂上が四つに分かれてはおらず、一種理想化された形ともいえる。同じころの絵巻には頂上をきれいに三つの峯に分けて描くものも見られ、次第にこの三峯型が富士山を描く一つの型になっていく。

室町時代雪舟筆とされる「富士三保清見寺図」(永青文庫)は、この三峯型の富士山を画面左に描き、そのふもとに清見寺、

右側に三保松原を描く。このような位置関係に実際に富士山や三保松原が見える場所として、静岡市南西部日本平方面が挙げられている。この作品自体は雪舟の原画ではなく室町時代の古模本と考えられているが、原本の筆者とされる雪舟が、実際に日本平あたりから富士山を眺望して本図を描いたのかはわからない。三保松原、清見寺も古来名所として知られ、これらを組み合わせ描く絵が雪舟以前にも存在した可能性はあるのである。いざずれにしてもこのように画面左側に富士山を描き、そのふもとに清見寺、右側に三保松原を配置する構図は、この後多くの作品に継承されていく。一種富士山の理想の姿として、人々に認められ、求められるのである。

狩野探幽は、江戸幕府の御用絵師となり江戸時代を通じての狩野派隆盛の基礎をつくった人物であるが、多くの富士山図を描いている。それらは評価も高く需要も多かったと考えられるが、そのほとんどは先の構図を継承したものである。例えば「富士山図」(静岡県立美術館、図)を見てみよう。画面左



狩野探幽《富士山図》 静岡県立美術館所蔵

に三峯型の富士山を描き、ふもとに清見寺、右側に三保松原を描くのは、雪舟の作品と同じである。探幽は江戸と京都を行き来する生活の中で、何度か東海道を旅し、実際に富士山を目にし、それをスケッチするということを行っている。スケッチされたのは様々な場所から見た富士山の変幻する様子であり、生き生きとした描写が見取れる。しかしこれらのスケッチは実際の富士山図の制作にそのまま生かされることはなかった。むしろ探幽はこの作品では様々なイメージを富士山に重ね合わせることに腐心している。例えば中国の名所、瀟湘八景のイメージ、「遠浦帰帆」の帆船、「洞庭秋月」の月、「平沙落雁」の雁といったようなモチーフを描きこむことで、日本の名所である富士山に中国の名所である瀟湘八景が重ね合わせられる。また三保松原の先端近くに飛翔する鶴を小さく描くが、これは富士山を蓬萊山(中国で仙人が住むとされる山、蓬萊山には鶴が描かれることが多かった)と重ね合わせてみる古来の考え方によっているという指摘もある。この絵を見た人は細かく描写されたこれらのモチーフを見つめる中で、さまざまなイメージを富士山に重ね合わせる、一種知的な遊戯を行っていたと考えられる。

以上は一部の例だが、富士山には時代によって様々なイメージが投影されてきた。単に美しい山を描くというだけでなく、そこに何が託されてきたのか、富士山に古来人々がどのような思いを抱いてきたのか考える必要がある。

今回は、富士山を対象に優れた文学・芸術作品を生み出した地である

「三保松原」を紹介します。

古より知られた景勝地

約7kmの砂嘴に5万4千本の黒松が茂り、北東に富士山を仰ぐ三保松原は古くから日本の景観美の典型として有名な存在でした。三保松原のある三保半島は、有渡丘陵（日本平・久能山）の南半分が波に削られてできた砂礫と安倍川からの砂礫が駿河湾の沿岸流によって運ばれてきたもので、約6千年前に現在の形となったと考えられています。地名の由来は沿岸流の強弱によってできた内海側の三つの岬を稲穂にたとえたという説が有力です。



上空から見た三保半島（静岡県清水港管理局提供）

半島のほとんどは砂地であり、やせた土地を好む松が全体に生い茂るようになります。対岸の清見瀨（現静岡市清水区興津）から見たその景色の美しさは奈良時代に編まれた万葉集に「蘆原の浄見の崎の見穂の浦のゆたけき見つつもの念いもなし」（田口益人）と詠われています。鎌倉時代初期には

後鳥羽上皇が「清見瀨 富士の烟や消えぬらん 月かけみかく 三保のうらなみ」（玉葉集異本歌）と富士山とともにこの景色を詠いました。上皇は各地の名所を襖などに描かせ、それを和歌の題材にしていたことから、三保松原がよく知られた景勝地の一つだったことが伺えます。

室町時代になると足利家や今川家などが三保から清見瀨へ船で渡るコースで三保の景色や富士山の眺めを楽しみました（後には、逆コースの方が一般的になります）。また、徳川家康はこのコース上の三保半島内海側に「貝島御殿」を建て、そこに「富士山見櫓」を設けています。江戸時代を通して美しい砂浜と松原で東海道の名所とされた三保松原は、大正11年（1922）に日本最初の「名勝」の一つとして国文化財に指定されました。

### 特別な思いを抱かせる場

右下の図は三保松原・富士山・清見寺（第二面参照）を西洋の技法によって描いた司馬江漢（1747-1818）の作品です。明治以降は、富士山に魅せられ、三保に居を構えた洋画家の和田英作（1874-1959）や富士山写真家として有名な岡田紅陽（1895-1972）が外海側からの風景を題材にした作品を生み出しました。

松・海・富士山の織り成す景観美は、

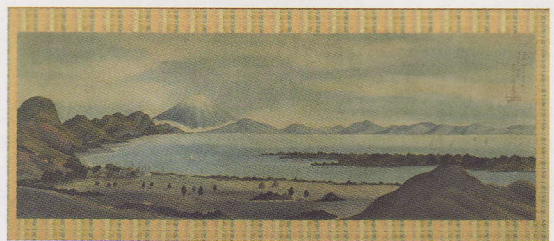
このように多くのの人によって芸術の対象とされてきました。

また、三保松原には「羽衣伝説」があります。そのあらすじは、羽衣の松に降り立った天女が漁（漁）師に羽衣を奪われてしまい、やむなく彼と結婚しますが、夫のいない隙に羽衣を取り返し天上へ帰るといふものです（東海道名所記）。

室町時代には漁師・白龍と天女の交わりを描いた謡曲「羽衣」も創作されました。羽衣伝説とは異なり、天女は同情した白龍に羽衣を返してもらい、お礼に舞を舞った後、富士山の天上方向へと消えていきます。

この話の中で天女が羽衣の松に降り立つのは、それが海のかなたにある不老不死の常世の国から近くの御穂神社に神を迎える際の依り代になっていること、また、天女が富士山の方向に去っていくのは、富士山の煙が天上と地上とを結んでいるという考えがあることと関係していると言われています。

羽衣の松と海の向こうにそびえる富士山は、芸術の対象となり、伝説を生むなど人々に様々なインスピレーション



司馬江漢（駿河湾富士山遠望図）寛政11年（1799）静岡県立美術館所蔵

ンを与える特別な場所といえるのではないのでしょうか。昨年11月、三保松原を視察した世界遺産の専門家ノーラ・ミッチェル氏（第四面参照）も「雨で見えなかつたが富士山の存在を感じた」とおっしゃっていました。

### 松原を守るために

残念ながら半島全体を覆っていた松原は明治以降の開発などで失われていき、外海側に残された松も松くい虫（マツノザイセンチュウ）の被害や、安倍川での土砂採取による砂礫の供給減少（現在は採取が中止されています。）により危機に瀕しています。

どんなに美しい風景も、その価値を伝え、守っていく人間の取組が無ければ時代の変化の中で消え去ってしまいます。

三保松原の美しさをめぐるだけでなく、松原の保存に向け努力されている方々がいることや、その方々の三保松原保存への情熱にも目を向けていただければと思います。



三保松原からの富士山（撮影 窪田敏）

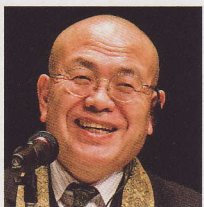
# 富士山世界文化遺産国際シンポジウムから



クリスティーナ・カメロン氏



ノーラ・J・ミッチェル氏



田中利典氏



稲葉信子氏

平成20年11月9日、富士山の顕著な普遍的価値を探るため、国内外の世界遺産専門家を招へいし、「世界遺産と富士山の象徴性」をテーマに国際シンポジウムを開催しました。

海外専門家から富士山の「顕著な普遍的価値」は、「信仰」と「芸術性」から証明することが可能であるとの御意見をいただき、登録への見通しは明るいものとなりました。

## 国内外の世界遺産専門家

今回招へいしたのは、平成20年7月の第32回世界遺産委員会で議長を務めたクリスティーナ・カメロン氏、米国イコモス文化的景観委員会委員のノーラ・J・ミッチェル氏、「紀伊山地の霊場と参詣道」の世界文化遺産登録に尽力された金峯山寺（奈良・吉野）執行長の田中利典氏及び静岡県学術委員会委員の稲葉信子氏の4名です。

## 富士山への意見・提言

パネルディスカッションにおいて、『富士山』に対し各専門家から貴重な意見・提言がなされたので、その内容を紹介します。

### ■富士山の象徴性

・日本人が自然に対し抱いてきた「自然観」「自然に対する畏怖」「神仏に対する神聖な思い」が富士山に集約されていること

### ■富士山の価値

・富士山という自然に「信仰」「芸術性」といった文化が反応していること（ユネスコの「評価基準」の「(iii)文化的伝統の物証」「(vi)信仰・芸術との強力な関連性」に該当すると思われること）

### ■富士山の保存管理

・「関係者の協力体制」「観光産業の管理」「関係者全員の『世界遺産を守る担い手』としての自覚」の3点が大切なこと

### ■富士山への提言

・富士山の世界文化遺産登録に向けた取組が「日本人が失いつつある『信仰心』『自然観』を取り戻すきっかけ」となれば、大きな意義があること

・世界遺産登録は「ゴール」でなく、富士山の保護・保全の「スタート」であること

### 今後の取組

今回いただいた意見を基に、現在選定されている構成資産候補について、「信仰」「芸術性」の観点から幅広く綿密に、改めて調査・検証を行い、「世界遺産推薦書（原案）」を作成します。



シンポジウム会場の様子  
（県内外からの参加者約300名が熱心に聴講した）

## ◎世界遺産用語解説『世界遺産評価基準』

世界遺産委員会が定める「世界遺産条約履行のための作業指針」に規定されており、全部で10の基準があります。ある資産がこの基準の1つ以上を満たすとき、この資産は顕著な普遍的価値を有するとみなされます。

海外専門家からの意見にあった「(iii)文化的伝統の物証」「(vi)信仰・芸術との強力な関連性」の全文は、それぞれ次のとおりです。

- (iii) 現存するか消滅しているかにかかわらず、ある文化的伝統又は文明の存在を伝承する物証として無二の存在（少なくとも希有な存在）である。
- (vi) 顕著な普遍的価値を有する出来事（行事）、生きた伝統、思想、信仰、芸術的作品、あるいは文学的作品と直接または実質的関連がある。（この基準は他の基準とあわせて用いられることが望ましい）